

文体論の研究

豊田昌倫

書物の整理に必要なのは膨大なエネルギーと集中力だと話には聞いていた。ただ、自分の本なので処分すべきは処分して簡単に身軽になれる、と高を括っていたところ、昨年春の整理には半年近くもかかってしまった。実際、整理は遅々として進まない。本棚の隅や段ボールの中で冬眠中の本を久しぶりに取り出すと、その書物を購入した時期や経緯まで脳裏に浮かび、ページをめくりながらしばし往時に思いを馳せたりしてしまうからだ。それはそれで濃密な読書の時間になるのだけれども。

作業の合間に、今は廃刊となった月刊誌『英文法研究』（研究社）1957年10月号にふと目がとまった。文法の専門誌には珍しい「文体論特集号」で、「文体論——最近の動向」と「現代英米作家の文体」が2本柱の編集である。前者から数編の題名と著者をご紹介すると、「文体論について——主としてドイツを中心に」（東田千秋）、「英訳聖書の文体」（斎藤 勇）、「スタイルとは何か——J. M. Murray: *The Problem of Style*」（小川和夫）、「H. Read: *English Prose style* について」（大山敏子）、「B. Dobrée: *Modern Prose Style* について」（山田泰司）、「Vernon Lee の文体論」（木原研三）、「バイイを中心としたフランスの文体論」（山本忠雄）など。後者では「ロレンスの文体」（村岡 勇）、「T. S. エリオットの文体について」（安田章一郎）、「グレアム・グリーン の文体——その比喩について」（青木雄造）、「ヘミングウェイの文体」（谷口陸男）、「フォークナーの文体」（佐伯彰一）が収められている。

なんと豪華な顔ぶれだろう。英米文学語学の大家や代表的な研究者がこぞって文体を論じる夢の饗宴である。特集の前者では英国の文体論に加えて独仏で発展した独自の文体論まで論じられ、視界の広さには驚かされる。文学の専門家による各作家の文体スケッチも絶品である。わずかな紙幅の中に作家の特徴が浮き彫りにされてゆく。当時の幸福な読者は、「文体論は文芸批評と言語学の架け橋」と実感できたのではなかったか。文体論の饗宴から半世紀以上経過した現在、同工の試みとして語学と文学の研究者が共に作家の文体を論じる機会に恵まれるよう希望したい。

ではタイムスリップから抜け出して、新刊の中から異色のスタイル論、Steven Pinker, *The Sense of Style: The Thinking Person's Guide to Writing in the 21st Century* (Allen Lane, 2014) をご紹介しよう。本書の構成は次の通りである。'Prologue', 'Chapter 1: Good Writing', 'Chapter 2: A Window onto the World', 'Chapter 3: The Curse of Knowledge', 'Chapter 4: The Web, the Tree, and the String', 'Chapter 5: Arcs of Coherence', 'Chapter 6: Telling Right from Wrong'. 現

代における「知の巨人」と目される Pinker が、「文体感覚」をどのように解き明かすのかと期待が高まるが、‘Prologue’を‘I love style manuals.’と始めたように、著者の当面の関心は stylebook における style, すなわち rules of usage に向けられているようである。本書で扱われる対象自体は、abstract nouns, nominalizations, passive voice, jargon, abbreviations, technical vocabulary, left-branching, verbiage, syntactic ambiguities, coherence などで、W. Strunk & E. B. White, *The Elements of Style* (1959) など従来の stylebook とそれほど大差があるわけではない。しかし、本書の論述は現象面に留まることなく、随所に著者が第一線で切り開く認知諸科学の知見を垣間見ることができる。a spade を a garden implement, an earth-turning tool などに変化させる ‘elegant variation’ について ‘Avoid elegant variation.’ あるいは ‘Don’t use a word twice on one page.’ との相反するガイドラインのどちらを取るべきか——。Pinker はこうした二項対立を避けて、‘Traditional style guides don’t resolve the contradiction, but psycholinguistics can help ... But wording *should* be varied when an entity is referred to multiple times in quick succession and repeating the name would sound monotonous or would misleadingly suggest that a new actor had entered the scene.’ (下線筆者) と述べている。

100 ページを超える紙幅が割かれている第 6 章 ‘Telling Right from Wrong’ において、著者は ‘The goal of this chapter is to allow you to reason your way to avoiding the major errors of grammar, word choice, and punctuation.’ という。読者が「自分で推論して判断を下す (reason)」という目的は、この章に限らず本書全体を貫いて認められ、その過程を追う作業はスリリングでさえある。第 6 章の文法に関する項目としては、adjectives and adverbs; ain’t; between you and I; can versus may; dangling modifiers; like, as, such as; possessive antecedents; preposition at the end of a sentence; split infinitives; that and which; verbing and other neologisms など。ごく基本的なものが多いが、読者はこうした伝統的な語法の考察から新たな発見への道を体得し、本書が副題として掲げられた ‘The Thinking Person’s Guide to Writing in the 21st Century’ であることを実感するのではないか。さらにダイナミックな言語世界の最中に身を置いて、すでに 7 冊の優れた書物を世に送った、「書き手」としての Pinker 自身の「文体感覚」に迫ることができるように思われる。

本来は来期扱いにすべきではあるが、ここで英国からの訃報をお伝えしなければならぬ。Lancaster 大学名誉教授 Geoffrey N. Leech 氏が昨年 8 月 19 日に永眠された。Lancaster 大学の元同僚 Mick Short 氏からの私信によれば、Leech 教授は日本人学生の論文指導中に倒れてそのまま他界されたという。昨年 5 月には創価大学に招かれて来日し、7 月には大著 *The Pragmatics of Politeness* (Oxford: Oxford University Press) を出版された直後での Leech 教授の突然の悲報は、世界の学会に衝撃を与え

文体論の研究

た。5月の来日中、Leech 教授は自らのご希望で17日と18日に京都大学と神戸大学でそれぞれ特別講演を行った。日本での最終講義となった18日には、‘politeness’研究の最先端を平易に解説し、Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day* の会話における‘politeness’の分析にまで話が及んだ。あらためて振り返ってみると、今回のLeech 教授の連続講義は、1980年代に神戸大学文学部と90年代に京都大学文学部に外国人招聘教授として滞在された、ゆかりの深い関西への farewell tour であったように思われてならない。

英文法から意味論、コーパス言語学、語用論等にいたる Leech 教授の膨大な業績には圧倒される。文体論に関しては、*A Linguistic Guide to English Poetry* (1969), *Style in Fiction: Linguistic Introduction to English Fictional Prose* [Mick Short と共著] (1981), *Language in Literature: Style and Foregrounding* (2008) がある。*English Poetry* と *Style in Fiction* は、英詩と英米小説の文体研究の中で今なお燦然と輝く金字塔である。しばしば文体論は言語学のテキスト分析への適用と考えられてきたが、Leech 教授の研究は特定の方法論や術語に依存することなく、類稀なる感性に基づく深い読み裏付けられている。一例を掲げると、*Language in Literature* に収められた‘Style in interior monologue: Virginia Woolf’s “The Mark on the Wall”’は、‘phonology, lexigrammar and semantics’から‘interpersonal function’にいたる、総合的な観点からの論述において余すところがない。著者の本領が発揮された珠玉の論考である。英語学の広大な領域にわたる Leech 教授の偉大な功績は、今後の世代にも必ずや受け継がれ、さらに深められていくことであろう。

主として大学英語教育学会 (JACET) を通じて日本に多くの知己を得た Leech 教授は、大の親日家であった。Lancaster 大学では日本人研究者を率先して受け入れ、日本での講義、講演およびワークショップ等でわれわれに良質な刺激を与え続け、日本における英語学の発展と興隆に貢献された。とりわけ Leech 教授の真摯で謙虚な人柄は、礼節を重んじる日本人の胸を打った。研究も講義もすべて労を惜しまぬ全力投球。ユーモアを忘れず、笑顔の素敵な英国紳士であった。

Leech 教授の急逝は惜しみて余りある。ただ、愛する Lancaster の地で最後まで生涯研究者の道を全うされたのがわれわれにとって唯一の慰めである。ご冥福を心からお祈りする。

最後に国内の研究論文に目を転じよう。小説、詩、演劇、その他の順に業績を列挙しておく。Masako Ishii, ‘Personalities and Discourse Styles: The Cases of Tryan in *Janet’s Repentance* and St John in *Jane Eyre*’ (京都大学大学院 *Zephyr*, 26), 石川慎一郎「コーパス文体論の可能性: プロンテ姉妹の文体的位相を例に」(『文体論研究』第60号), 宮崎隆義「‘A Changed Man’の語り手と物語の技巧」(徳島大学『言語文化研究』第21巻), 浅香加奈子「*Mrs. Dalloway*の話法——意識の流れ表現の技法と

特徴」(大阪大谷大学大学院『志学台レビュー』第19・20号合併号), 野田 明「『ベニート・セレーノ』の言葉遣いと語り」(三重大学 *PHILOLOGIA*, 45), Mariko Yoshii, 'The Realm of Holgrave's Mesmerism and the Narrative Strategy in *The House of the Seven Gables*' (大阪大学『待兼山論叢』第47号), 長瀬恵美「『グレート・ギャツピー』の音韻とリズム」(『就実英学論集』第30号), Masahiro Hori, 'Approaching Literature as a Corpus: Gender-Based Conversational Styles in Hemingway's "Hills Like White Elephants"' (S. Yamazaki & R. Sigley eds., *Approaching Language Variation through Corpora: A Festschrift in Honour of Toshio Saito*, Bern: Peter Lang), 持留浩二「サリンジャーの作品における語り手の信用性——シーモアの変容」(『文体論研究』), Shigeo Kikuchi, 'Author's voice from between the lines: A functional view of literary discourse' (M. Toyota & S. Kikuchi eds., *New Horizons in English Language Teaching: Language, Literature and Education*, Hirakata: Kansai Gaidai University, 2013), Masanori Toyota, 'The choice between repetition and variation as a point of entry into teaching the language of English fiction' (*New Horizons*), 大沼由布「二つの韻文版『マンデヴィル旅行記』における散文版からの変化」(同志社大学英文学会『主流』第75号), 豊田昌倫「『緊張』から『解放』へ——Robert Browning, 'Porphyria's Lover'の音を読む」(『現代英語談話会論集』第9号), 桂山康司「英詩における口語(speech)の台頭とその超克——詩的言語のイデオロギーとホプキンス」(京都大学『英文學評論』第LXXXVI集), 高橋優季「詩の創作における W. B. Yeats と D. G. Rossetti の Beryllomancy」(青山学院大学英文学会『英文學思潮』Vol. LXXXVI), 豊田昌倫「『収斂』から『拡散』へ——Wilfred Owen, 'Futility'の音を読む」(京大英文学会『アルピオン』復刊59号), 古庄 信「シェイクスピアにおける修辞法の研究——*The Taming of the Shrew*における反復技法について」(学習院女子大学『紀要』第16号), 木内久美子「初期ベケットにおける『擬人化』の問題——『剽窃』の模倣の実践から『擬人化』批判へ」(東京工業大学『ポリフォニア』第6号), 笠本晃代「Oscar Wilde の *A Woman of No Importance* における人物の呼称と言及について」(*KWASSUI ENGLISH STUDIES*, No. 21), 田淵博文「*Newsweek* の『特別記念号』に掲載されたエリザベス女王を指し示す言語表現について」(『就実論叢』第43号), 福田慎司「オバマ大統領第二期就任演説の内容と特徴的修辞技法の分析」(福岡大学『人文論叢』第45巻, 第1・2号), Yoshifumi Saito, 'Literature in English language teaching in Japan' (*New Horizons*), 大森裕實「転移修飾(Transferred Epithet)に関する言語学的考察——文体論から語用論及び認知意味論へ」(愛知県立大学『紀要』第46号), 坂本 茂「話し手の感情表出表現としての IT-clefts と予期される聞き手の反応」(『函館英文学』LIII).

(京都大学名誉教授)